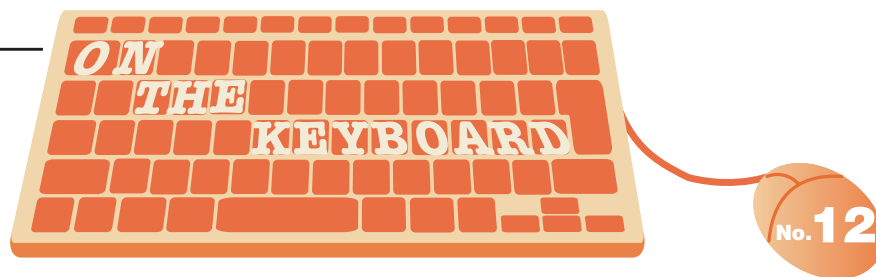
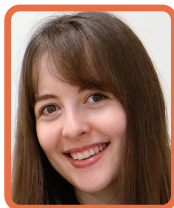


By Maya Jones



マヤ・ジョーンズ

1994年、英国・イングランド南東に位置するハンプシャー州生まれ。父親が英国人、母親がコロンビア人という家庭で育ち、幼少期から外国語と異文化に興味を抱く。2021年、ロンドン大学卒。専攻は日本語。在学中に来日し、1年間、東京外国語大学で学んだ。英国で開催された大学生対象の日本語スピーチコンテストで優勝するなど、卓越した日本語力を生かし、22年9月から東京都大田区の「おおた国際交流センター(Minto Ota)」で国際交流員として多文化共生を促進する仕事に従事している。趣味は絵画、写真、旅行、音楽・美術鑑賞など多岐にわたる。

## Differing cultural perspectives on life, death and love

In July 2023, I lost my beloved father to **pancreatic cancer**. Despite having experienced death within my family before, nothing quite prepared me for the pain of losing a parent. My father and I were extremely close, sharing many of the same interests, **personality traits** and perspectives, and as a result, my battle with **grief** has been far from easy.

Nevertheless, Japanese attitudes toward life and death have been helping me **come to terms with** his loss.

There is a tendency in the West

to **shy away from** difficult subjects such as **mortality** and grief. In Japan, these concepts are not avoided. Rather, they are **embraced** — the Japanese **sensibility** focuses on the **notion** of **impermanence** and highlights its **inherent** beauty.

Concepts such as *mono no aware*, the **transience** of things, and *utsuroi*, gradual and inevitable change, often serve as central themes in Japanese works of art. I have come to realize that grief is not something we heal from, but something we learn to live with. It is one of the many

ways in which we are changed and shaped as individuals throughout life.

Recently, a Japanese friend of mine told me that love is love precisely because it is transient; its impermanence is what makes it **sacred** and special.

I am lucky to have had a father that made saying goodbye so hard. The sadness I feel now is a **manifestation** of the love I received from him, the transience of that love making it **all the more** precious.

**pancreatic cancer**

膵臓(すいぞう)がん、膵がん

**personality trait(s)**

個性、人柄

**grief**

愛する人を失ったことによる深い悲しみ

**come...with**

(困難など)を受け入れる、~から立ち直る

**shy away from**

~するのを避ける

**mortality**

死、死の必然性

**(be) embraced**

受け入れられている

**sensibility**

感性

**notion**

概念、考え

**impermanence**

無常

**inherent**

固有の、本来備わっている

**transience**

はかなさ

**sacred**

神聖な

**manifestation**

表れ

**all the more**

だからこそ、なおさら

ジョーンズさんのエッセーは最終回です。次号からは米国出身のジェシカ・スガハラ・マカラさんのエッセーです。



音声は本文と一部異なる場合があります。

対訳

### 生と死、愛への視点をめぐる文化の違い

2023年7月、最愛の父を膵臓(すいぞう)がんで亡くしました。以前にも家族の死を経験したことはありましたが、親を亡くす痛みへの備えはできていませんでした。父と私はとても仲が良く、多くの趣味や個性、価値観を共有していたため、悲しみとの関いは決して楽なものではありません。

しかし、生と死に対する日本人の考え方は、父を亡くしたことで折り合いをつけるのに役立っています。

西洋では、死や悲しみといった難しい話題を敬遠する傾向があります。日本では、これらの概念は避けられていません。むしろ受け入れられ、日本人の感性は「無常」という概念に重きを置き、その本質的な美しさに光を当てます。

はかなさを意味する「もののあはれ」や、緩やかで避けられない変化を表す「移る

い」の概念は、日本の芸術作品の中心的テーマとなることがよくあります。私は悲しみというものが、そこから癒えるものではなく、共に生きるものなのだと理解するようになりました。人生の中で私たちを変化させ、個性を形づくる経験の一つなのです。

最近、ある日本人の友人が、愛ははかないからこそ愛なのであり、無常であるからこそ貴重で特別なものだと言ってくれました。

私は、別れをこんなにつらくさせる父親を持つことができ、幸運に感じます。今、感じている悲しみは、私が父から受けた愛の証であり、その愛のはかなさゆえに、いっそう貴重なものになっているのです。

(訳 田端節子)